

極楽寺だより



2019(令和元)年11月号

発行所：極楽寺（浄土真宗本願寺派）☎ 759-3803 山口県長門市三隅下野波瀬 3633 ☎ 0837-43-0625

秋の永代経法要の

ご案内

次の通りお勤めいたしますので、お誘いあわせの上、お参り下さいますよう、ご案内いたします。

十一月十三日（水）

昼一時半 夜七時半

十一月十四日（木）

昼一時半

講師 美祢市明巖寺住職

中島昭念 師

永代経法要とは

住職が子どもの頃は、山を

走り回って遊んでいました。

しかし、今は大人でもなかなか入ることができません。

なぜなら、山に入る人がいなくなっ

たことで、道がなくなりましたからです。

先に行く人が踏みしめる歩みによって、道は

できるのです。私たちのところにまで、お念

仏の教えが伝わってきたのも、先だつてこの道

を歩まれたご先祖があるから、志を納めお寺

を護つてこられた先輩方があるからなのです。

そして次に歩む者がなければ、道は途絶えて

しまいます。永代経法要とは、永代にわた

り伝えられたこのみ教えを感謝と共にいた

だき、永代にわたり伝えていこうという尊い営み

なのです。



ご予約ください

- ◇ 12月18日14時 仏婦報恩講
- ◇ 12月31日夜23時45分 除夜の鐘撞き
- ◇ 1月1日10時 元旦会
- ◇ 1月14～16日 御正忌報恩講

お取越しの 季節です

お寺にご連絡下さい。
日程を調整した上で、
お参りにうかがいます。



「お取越し」とは、真宗寺院において最も大切な行事である親鸞聖人のご法事「報恩講」を、ご命日よりお取越し（早めて）各家々で勤めるといふ、真宗門徒にとって大切な伝統行事です。でも、どうして親戚でもない人の法事を勤めなくてはならないのでしょうか。そこには、大切な心が込められているのです。

お取越しを
お勤めしましょう
キャンペーン

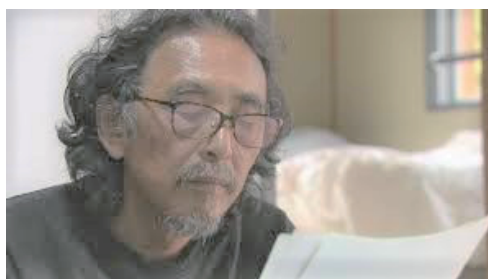
「開かれた」一人

世の中には、凄い人がいるものです。私がある人を知ったのは、NHKで放送された『事件の涙』という番組でした。この番組は、事件の被害者・加害者、そして捜査陣などの「人間」にこだわり、事件に潜む知られざる「物語」を描くドキュメンタリー番組です。

宮崎でトラックドライバーをしている湯浅洋さんは、二〇〇八年東京・秋葉原で起きた無差別殺傷事件の被害者です。その日、多くの人で賑わう秋葉原の歩行者天国に、一台のトラックが突っ込んできました。五人をはねたトラックから降りてきた男は、刃物を持ち、人々に襲いかかります。当時タクシー運転手をしていた湯浅さんは、たまたま通りかかり、襲われていた人々を助けようと車を降りた直後、男に刺され重傷を負ったのです。事件から十一年、いまだ体にしびれが残るなどの後遺症に悩まされています。

湯浅さんは、死刑判決を受け、現在東京拘置所に収監されている加害者・加藤智大被告に、今も手紙を送り続けています。それは、自分が刺された恨みからではありません。湯浅さんが苦悩しているのは、「誰一人助けることができなかった。それどころか被害者になり、逆に迷惑をかけただけの話で終わっている」という自分の無力さ。そして、なぜあのような事件を起こしたのか、その真意を知りたいからなのです。

自分が刺されたことよりも、助けられなかった人たちのことを思う。これだけ



湯浅 洋さん

でも、凄い人だと驚かされます。しかし、それだけではありません。加害者の真意を知ろうとするのは、事件に向き合っただけから。そしてそれは、同じような事件を繰り返してはならないという思いからなのです。

加藤被告が、事件を起こす前にネットに書き込んだ言葉は、今も拡散し続けています。格差を嘆き、いじめに苦しみ、努力が認められないと思う若者の心に、凶行におよんだ彼の言葉が共鳴している。その言葉が、若者たちの《閉ざされた》心をさらに頑なにさせ、社会を呪う方向へと導いている。だからこそ、湯浅さんは「再び、同じようなことが起きてはならない。死刑が迫っている加藤被告には、せめてその前に人としての言葉を残して欲しい」と手紙を送り続けておられるのです。

湯浅さんは、普通のトラックドライバーのおじさんです。政治家でも、思想家や哲学者でもありませんし、社会を啓蒙し変革しようと思われているのでもありません。しかし、その問いや苦悩は、既に個人的なものを大きく超えています。「加害者には、人間を回復して欲しい。そして二度と同じような被害者を、加害者を生みたくない」。その心は、そして問いや願いは、過去の事件だけでは



なく、未来へ、あらゆる人々へと《開かれて》いるのです。

湯浅さんは被害者ですから、加害者に対して心を《閉ざし》、怒みを持つても何ら不思議ではありません。ところが、《開かれた》問いに立ち、願いを持つておられる。それは、出遇っている世界のスケールが違うからでしょう。湯浅さんは、あらゆる人々を思っておられるのですから。何とも、凄い人ではありませんか！

《閉ざされた》心が呪いを生み、《開かれた》心が願いを生むことを、生き方を通して示してくださっているのです。

そんな湯浅さんの姿に、私は親鸞聖人を想うのです。親鸞聖人は、高僧といわれた人でも、当時の有名人でもありません。徹底的に「人間」にこだわり、庶民の中で共に暮らし、共に救われていく道を求められた方でした。

『歎異抄』という書物には、「さるべき業縁のもよぼさば、いかなるふるまひもすべし」（縁に触れば、何をしでかすかわからないのが私である）という親鸞聖人の言葉が記されています。

聖人は「彼は、あの環境で育ち、様々な縁に触れたからこそ、このような愚かなことをしたのだ。ならば、私も同じような縁に触れば、同じふるまいをするのかもしれない。彼と私の違いはたまたまでしかない。彼は、私だ。そうであつたかもしれない私、

そうなるかもしれない私なのだ」と、様々な人々の中に、自分の姿を見出していかれたのです。

親鸞聖人の問いもまた、《開かれて》います。「彼と私は違う」といった個人的な経験に《閉じて》はいません。「彼も私も、同じ人間だ」という立場の問いなのです。だからこそ、「彼が救われなければ、私は救われることはできない。いや、すべての人々が救われる教えでなければ、私の救いはないのだ」と願われたのです。この問いの深さ、スケールの大きさ！ 圧倒されます。

ところが、同じく『歎異抄』には「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」（阿弥陀様が長年の修行によって立てられた願いは、この私一人を救うためのものであった）とあります。しかし、この「一人」とは、親鸞聖人個人を指す言葉ではないのでしょうか。



すべての生きとし生けるもの（十方衆生）を救うために、阿弥陀様の願い（本願）は立てられたのです。

「あなたが過ちを犯しても、決して見捨てはしない」

「必ず、敬われ尊ばれる仏にさせる」

「だから、仏に成る身として、大切に生きてほしい。」

失敗をしても、人生を投げ出さないでほしい」

それは、私がどのような縁にふれ、どのようなふるまいをしても、悲しみ、慈しみ続けてくださる心です。どんな「私」であっても決して見捨てることのない仏様が、阿弥陀様だと教えられるのです。

つまり、この「一人」とは、すべてに《開かれた一人》なのです。私であり、あなたであり、あの人です。様々な立場の人が、「この教えは、この私を救うためのものであった」とうなずける教えでなければ、私は救われません。親鸞聖人は、すべての「私」が救われる道を求め、阿弥陀様の広大な本願のはたらきに出遇われたのです。だからこそ、親鸞聖人の言葉は時代を超え、地域や立場を超えて、今も多くの人びとの心に響くのでしょうか。

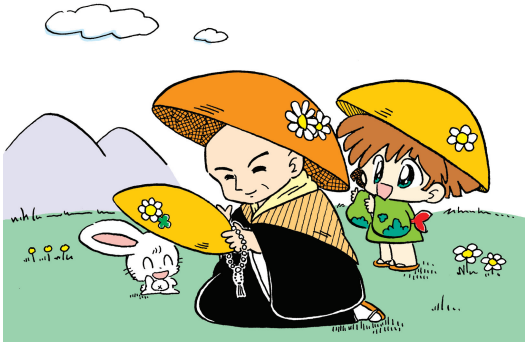
「お取越し報恩講」とは、まさに親鸞聖人の歩みを通して、「この教えは、この私を救うためのものであった」と気づき、うなずかれた人々の歴史でもあるのです。

湯浅さんが、加藤被告に送り続けた手紙には、未だ返事はありません。それでも湯浅さんは、彼に少しでも近づきたいと、彼の故郷・青森を訪ねたりもしました。

獄中の加藤被告は二〇一八年に、『人生ファイナルラップ』という詩を発表しています。そこには事件前の書き込みと同様に、社会を怨み、嘆く《閉ざされた》言葉が綴られていました。「彼は、まったく変わっていない」、絶望的な思いを感じながらも、湯浅さんは手紙を書き続けています。「最後は人であってほしい」そう願いながら。

湯浅さんの願いが、加藤被告に届いて欲しい。心を《閉ざし》、加藤被告に共感する若者の心にも。そう思いました。そして同時にその願いは、この私にも問いかけるのです。

「あなたの心は、《閉ざされて》いないか」と。 ■



極楽寺揭示伝道 けいじでんどう



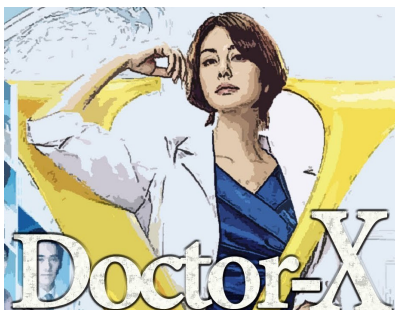
10月の言葉

「私、失敗しないので」

この言葉は、米倉涼子さん主演の人気ドラマ『ドクターX〜外科医・大門未知子〜』の決め台詞です。誰も、こう言い切ってみたいものですが、なかなかそうはいきません。してはいけないと思いつつも、ついつい失敗してしまいます。誰もが、好きで失敗するわけではないのですが。

そんなあなたに朗報です！（ここは、テレビ通販番組風に読んでください）「失敗をしない方法」というものがあるのです。しかも二つも。今や、様々な場で使われている方法です。

一つめの方法、それは…「何もしない」ことです。人間である限り失敗はつきもの。



ドラマの主人公のようにはいきません。ならば、失敗したくなければ「何もしない」が一番。余計な事には手を出さない。必要最小限のことしかやらない。実際に、そんな消極的な態度は至る所で見かけます。

最近、ビジネスや行政の現場で、「PDCAサイクル」という手法が定着しています。

- ① P Plan 計画 目標を設定し、計画を立てる。
- ② D Do 実行 計画に基づいて、実行する。
- ③ C Check 評価 計画通り実行できたかチェックし評価する。
- ④ A Action 改善 評価結果から見えた課題を、改善する。

という四つの段階を繰り返すことによって、業務を円滑に進める手法の一つです。

ところが、サッカーJリーグの村井満チエアマン（理事長）は、この「PDCAサイクル」の真ん中にMを入れた、「PDMCAサイクル」を推奨されています。Mとは、Miss 失敗です。プレーする限りミスは起こる。それが、サッカーの本質ではないか。つまり失敗がないということはプレーに絡んでいない、つ



まりチャレンジしていないこともある。だから、「積極的にミスをしていこう。それがチャレンジしているということでもあるのだ」という考え方です。

これはサッカーに限らず、人間の本質でもあるのでしよう。どんなに周到な準備をしても、人間である限り失敗はつきもの。それが許されなかつたら、新しいチャレンジはできません。

「やらない理由を探すのがうまくなると、成長は止まる」

これは、リクルートキャリアという会社の広告コピーです。そういえば、村井チエアマンは元リクルートの代表取締役社長。何かつながっているような気がします。

以前、東京海上日動火災という保険会社の広告には、こんなコピーがありました。

「失敗したらダメ」「失敗しても大丈夫」人はどちらの方ががんばれるのだろう”

「失敗をこわがる社会。何度でも挑戦できる社会。私たちの国は、今どちら側だろう”

皆さんは、どうですか。「絶対に失敗するな」と言われるのと、「失敗しても大丈夫だから、精一杯やれ！」と背中を押してもらえると、どちらががんばれますか。大抵の人は、迷わず「失敗しても大丈夫」

と背中を押してもらえらる方だと答えるでしょう。

しかし現実(げんじつ)はというと、「失敗をこわがる社会」になつてはいないでしょうか。失敗をすれば、これでもかと叩(たた)かれる。斬り捨てられる。それは、「過(あやま)ちの指摘(してき)」というレベルを超えて、「存在(そんざい)の否定(ひてい)」にながりがかねないほどの勢(いきお)いで。だから、必要(ひつやく)最小限(せうじんげん)のことしかやらない。挑戦(てんげん)なんかしない。そんな、委縮(いじゆく)し閉(と)じた社会になつているように思うのです。

ところが、いくら最小限(せうじんげん)の仕事でも、人間である限り失敗はつきもの。そこで、もう一つの「失敗しない方法」というものが出てきます。それは、「失敗を認め(みと)ない」ということです。言い逃(のが)れる為(ため)に「誤(ご)魔(ま)化(か)し」や「責任(せきにん)転嫁(てんか)」が行(な)われます。まさに、失敗を許(ゆる)さない社会が、失敗を報告(ほうこく)しない組織を作るのでしよう。

ただ、傷が浅(あ)いうちなら言い訳、言い逃(のが)れもできるかもしれないが、傷が深(ふか)くなつてしまふと取り返(かへ)しがつきません。企業(きぎやう)の謝罪(しやざい)会見(かいけん)には、そんな状況(じやうきやう)に陥(おち)つた事例(じれい)がいくらでも見受けられます。

謝罪(しやざい)会見(かいけん)では、「責任(せきにん)の所在(そんざい)」が強く問(と)われます。以前(いぜん)は、無責任(むせきにん)な行動(こうどう)に対して批判(ひはん)的に使(つか)われていた言葉(ことば)です。しかし、



今(いま)や違(ちが)う目的(もく)のために使(つか)われています。それは、「責任(せきにん)を押(お)しつけるため」に。

近頃(きんげん)、「責任者(せきにんしや)は誰(たれ)なのでしょう」という声(こゑ)を挙(あ)げる人のほとんどは、「私は責任(せきにん)を取りたくない」という思(おも)いから、誰(たれ)かに「責任(せきにん)を押しつける」ために、この言葉(ことば)を発(は)つています。昔(むかし)は「お互(たが)いさま」と責任(せきにん)を取り合(あ)っていましたが、今(いま)や、押しつけ合(あ)う時代(じだい)になりました。すべての始(はじ)まりは、「失敗(しぱい)してはいけない」という考(かん)え方(かた)からなのかもしれませぬ。

思想家(しやうしや)で武道家(ぶだうか)の内田樹(うちだたつる)先生(せんせい)は、「責任者(せきにんしや)を出(だ)せ」ということばづかひをする人間(にんげん)はその発語(はつご)の瞬間(しゅんげん)に、その出来事(きざい)を説明(せつめい)する重要(じゆうやく)なひとつの可能(かのう)性を脳裏(のうり)から消(け)してゐる／それは「もし、この件(けん)について自分(じぶん)にも責任(せきにん)があるとしたら、それは何か」という問(と)いへむかう可能(かのう)性(せい)である。／「責任(せきにん)を取る」というのは、端(たん)的に言(い)えば、「失敗(しぱい)から学(まな)ぶ」ということである。「責任(せきにん)を取(と)らせる」というのは、「失敗(しぱい)から学(まな)ばない」ということである。

(「責任(せきにん)を取る」という生き方『内田樹(うちだたつる)の研究室(けんきゅうしや)』)と言(い)われています。失敗(しぱい)から学(まな)ぶからこそ、対応(たいおう)能力(のうりよく)も上(あ)がり、引き出(ひきだ)しも増(ぞ)える。思(おも)いもよらない氣(き)づきや、出遇(であ)いも生ま(う)まれることでしょう。何(なに)より、失敗(しぱい)の活(い)かし方(かた)を学(まな)ぶことができ(き)れば、それは次第(しだい)に大(だい)切(けい)な経(けい)験(けん)へと変(か)わつていくのです。

ドラマの主人公のように、「私、失敗しないので」と言い切りたい。誰もがそんな思いを持っていきます。しかしその枠組みに捉われてしまつと、失敗を恐れ、委縮や誤魔化しの連鎖を生み、苦しみは深まるばかり。この悪循環は、仏教でいうところの「迷いの境界」そのものです。自分の力で、この枠組みから抜け出すことは容易ではありません。何より、捉われに気づくことさえ難しいのですから。

そんな「捉われの生き方しできない私である」という自覚のもとに、枠組みの外からの呼びかけ、阿弥陀如来の呼び声を聞き、応えていく道を歩まれたのが親鸞聖人という方でした。

親鸞聖人は「愚禿」と名のり、「悪人」の自覚を持ち続け一生を歩まれました。それは自分を卑下し、否定する生き方ではありません。「愚かでも、失敗をしても、私の人生はここにしかないのだ」と、現実を受け入れ、学び、聞こうとしていく姿です。その歩みが、新たな、そして豊かな世界との出遇いを開くのだと教えられますのです。■



マンガ『宇宙兄弟』より



9月の言葉

近頃は、ペットを家族のように思う方が増えました。同時に、ペットを亡くした時の悲しみも深く、「こんなに悲しいのなら、飼わなければ良かった」と言われる人も、多くあります。そんな時、私は思うのです。悲しいということは、かけがえのない時間を共に過ごしたから、大切な思い出があるからではないですか。ならば、「飼わなければ良かった」という言葉は、大切な思い出をも否定することになる。そちらの方が、もつと悲しいことではないですかと。「失った悲しみの大きさは、与えられていたものの大きさである」とは、私の尊敬する宮城顕先生の言葉ですが、まさに悲しみの大きさが、共に生きたかけがえのない人生を表しているのだと思うのです。



病床につかれた連れ合いを、長年看病された方があります。とても大変そうでした。でも、連れ合いの方が亡くなられた時に、涙をポロポロこぼしながら悲しまれるのです。その姿を見ていると「ああ、この人にとって連れ合いの方は、かけがえのない人だったんだ。そして、そんなかけがえのない人と出会うことができたとすることは、とても幸せなことなのかもしれない」と思いました。大変だった時間も、振り返れば大切にかけがえのない思い出。この方は、一度きりの尊い道を、歩いてこられたのだ。別れの涙が、その尊い時間を表しているのだと、改めて教えられたのです。



先日、友人から薦められて『おみおくりの作法』（監督ウベルト・パゾリーニ 2015年イギリス）という映画を観ました。正直、センスが良いとは言えない邦題ですが、原題は『STILL LIFE』、直訳すると「静物画」です。「静物画」とは、切花・果実・器等それ自体では動かないものを組み合わせ描いた絵のことですが、まさに文字通り「静物画」のように、静かで坦々とした地味な映画でした。同時に、とても味わい深く、考えさせられる映画でもありました。

イギリスには、孤独死した人の葬儀や後片付けを行う民生係という部署があるそうです。主人公は、その民生係をしている独り暮らしで40代の男性。葬儀は事務的に処理することもできるのですが、彼は生真面目に死者に対して敬意をもって接し、亡くなった人の身内を探すなど力を尽くし終えて、初めて葬儀を手配します。故人の身内や知り合いに、葬儀への参列を呼びかけますが、いつも出席者は彼一人。彼は故人の遺品から、そこにあった一人の人生を浮かび上がらせていきます。その丁寧さ故に効率さとは無縁で、安置所にはいつも多くの遺体がありました。それは、彼の死者に対する誠実さと敬意の裏返しなのです。一人の人生のかけがえのなさや思い出を尊重する姿が、しみじみと伝わってきました。

しかしある日、経費削減のための人員整理により、彼は解雇されることになるのです。若い上司は、誠実さや敬意などよりも、時間短縮、効率重視を求めていく人物。まさに、現代社会に生きる私たちの象徴のように描かれます。主人公が職場の後片付けを行う横で、新たな担当者のもと、効率良く遺体が処理されていくのが印象的でした。

主人公にとって、解雇通告の少し前に携わったピリー・ストーク



という男の葬儀が、最後の案件となりました。最後の仕事として、彼はこれまで以上に熱意をもって仕事に取り組みます。ビリーを知る人々を訪ね、イギリス中を旅するのです。「ろくでもないヤツだった」「迷惑をかけられた」「女にはもてたが、人間的には最悪だ」。ビリーの思い出を語りながらも、葬儀への参列を断る人々。しかし、主人公との会話を通しながら、それぞれの人生を、また噛みしめていくのでした。



故人との思い出は、遺された者の人生でもありません。故人を忘れるということとは、自らの人生をも失っていくということなのかもしれません。つらいことも、嫌なことも含めて、この私の人生なのです。主人公との会話の中から、それぞれの人生を少しずつ取り戻していく人々。そしてビリーの葬儀は、多くの人々の参列のもとに行われたのでした。しかし、そこには主人公の姿はありません。なぜなら…、気になる方は、ぜひご覧ください。

映画は、坦々と進みます。私たちの日常生活のリズムとは違い、ゆっくりと間を取りながら。しかし、この時間の進み方が、実はとても大切なものであり、私たちが失ってしまったものではないかと考えさせられました。

思い出を噛みしめる時間。自らを振り返る時間。出遇い、別れ、喜び、悲しみ。そんなひと時を通して、自らの人生がかけがえのない尊いものであることを味わう時間。そして共に過ごした時間は、故人の人生でもあり、遺された側の人生でもあること。それをゆっくりと噛みしめ、消化していくからこそ、人生は耕され、豊かになっていくのでしよう。

映画を観た後、改めて『STILL LIFE』という原題には、深い意味があるのではと考えさせられました。静物画(STILL LIFE)は、ただ、モノが描かれていると考えるのではなく、何を選び取り、どのように配置したのかという画家の意図が反映されていると見るべきだと言われます。ならばこの映画は、私たちが人生の何を選び取り、何をどう配置しているのかを、静かに問うものなのかもしれません。



ヴァニタス画

また静物画には、「ヴァニタス画」というジャンルがあります。権力や富を意味する様々な静物(冠や宝石)と共に、「人間は皆、必ず死ななくてはならない」ことを意味する頭蓋骨や腐った果物などを描き、観る者に「虚栄のむなしさ・はかなさ」を知らしめる画です。まさにこの映画は、時間短縮、効率重視を選び取る現代社会に描かれた、ヴァニタス画のように感じられました。

極楽寺 NEWS

そして、『おみおくりの作法』という、あまりセンスの感じられない邦題にも、大切なメッセージが込められていると思うようになりました。

私たちは、どんな「おみおくりの作法」をしているのか。作法を通して、共に過ごした時間の何を選び取り、どう振り返っているのかが、問われている。そう、受け止めるようになったのです。

ただ、それにしても、もう少し良い題名があったのではないかという思いも、捨てきれないのですが。 ■

台風で、 盆法座二日目中止に

今年には台風被害が多い年ですが、何とお盆真つ只中にも、長門を直撃。急遽、二日目・十五日の法座を中止し、「平和の鐘」は初日・十四日の法座の後に撞きました。幸い、台風の影響は大きかったことはありませんでしたが、二日目にお参りされた方もあったようで、本当に申し訳ないことでした。来年は、こんなことにならなければいいのですが。 ■



平和の鐘は、
十四日に撞きました

大津東組若婦人研修会 (十月十一日) 大津東組仏教青年の集い (十月十二日)



大來尚順先生

大津東組(三隅・旧長門地区の真宗寺院の集まり)の、若婦人研修会(十月十一日)と、仏教青年の集い(十月十二日)を、極楽寺で引き受けました。

若婦人研修会は、TV番組『ぶっちゃけ寺』(テレビ朝日)や『ちぐスマ』(TYS山口放送)にご出演の大來尚順先生を講師に迎え、身近な言葉を通して、仏教に触れる機会をいただきました。

また、仏青の集いでは、百人以上が集まり、大いに盛り上がりしました。ご近所の皆様、うるさかったことでしょう。申し訳ありませんでした。極楽寺の仏青は、何と来年で結成五十年を迎えます。こうして続いていくことは、本当に難しいことであり、尊いことだと思えます。これまでの仏青を支えてくださった方々、そして今もなお参加してくださる皆さんに極楽寺は大きな力をいただいています。 ■



お知らせ

浅田・沢江・上ゲ・殿村の世話人を、大田貢さんが引き受けてくださいました。
また、野波瀬中の世話人・斉藤達男さんが退任され（在任 23 年 8 ヶ月）、新しく田中征二さんが就かれることになりました。大田さん、田中さん、よろしくお願いいいたします。
斉藤さん、長い間本当にありがとうございました。

住職からの
お願いです

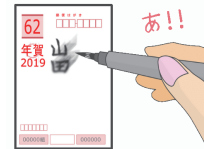
引き続き、今回も・・・
夜の法座に、お参りください



物でお布施

家庭で眠っている物を、周りの人のために、活かしませんか。
下記の物があれば、お寺までお持ちください。

書き損じはがき・未使用切手・商品券
未使用テレフォンカード・ビール券など金券
CD・DVD・ゲームソフト・ゲーム機器



仏事、葬儀、納骨・・・、わからないこと、困ったことがあれば、
極楽寺にご相談下さい。どうぞ、ご遠慮なく

0837 (43) 0625



極楽寺ホームページ

極楽寺 .com で検索を

極楽寺だよりの過去の記事をはじめ、
盛りだくさんの内容です。

住職の



□今年のカーブは、残念ながら四位に終わりました。悔しいシーズンでしたが、長い低
迷期を知る住職にとっては、これが当たり前。「よくぞ、これまで三連覇もしてきたな
あ」という思いです。選手の皆さん、お疲れ様でした。来年も、楽しませてください。

□カーブのシーズンは終わりましたが、ラグビーは燃えています。ワールドカップでの
日本代表の活躍には、本当に興奮させられっぱなしです。□「One for all All for one」（一人はみんなのため
に みんなは一人のために）がラグビーの精神だと言われます。泥だらけになりながらも、身を挺してみんなの
ためにプレーするひたむきな姿。ボールをつなごうとフォローし合う姿には、本当に心を打たれます。□近頃は、
泥だらけになりながら、地域やみんなのために尽くす人を、小馬鹿にし、偽善者扱いする時代です。「あの人は、
好きでやっているんだから、やらせていたらいいのよ」という言葉を聞いた時には、本当にガッカリしました。
そんな時代だからこそ、ラグビー選手が輝いて見えるのかもしれませんが。□日本代表初の決勝トーナメント進出
は、まさに快挙であり、選手たちは HERO（英雄）です。しかし、これをきっかけに、みんなのために泥だらけ
になりながら尽くしている UNSUNG HERO（謳われぬ英雄・縁の下の力持ち）が敬われる時代になればいい
なあと思う、今日この頃です。（住）